

第四章 國務大臣及樞密顧問

國務大臣ハ輔弼ノ任ニ居リ詔命ヲ宣奉シ政務ヲ施行ス而シテ樞密顧問ハ重要ノ諮詢ニ應ヘ樞密ノ謀議ヲ展フ皆天皇最高ノ輔翼タル者ナリ

第五十五條 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任

ス

凡テ法律勅令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副署ヲ要ス

國務各大臣ハ入テ内閣ニ參贊シ出テ各部ノ事務ニ當リ大政ノ責ニ任スル者ナリ凡ツ大政ノ施行ハ必内閣及各部ニ由リ其ノ門ヲ二ニセス蓋立憲ノ目的ハ主權ノ使用ヲシテ正當ナル軌道ニ由ラシメムトスルニ在リ即チ公議ノ機關ト宰相ノ輔弼ニ依ルヲ謂フ

ナリ故ニ大臣ノ君ニ於ケルハ務メテ獎順匡救ノ力ヲ致シ若其道ヲ愆ルトキハ君命ヲ藉口シテ以テ其ノ責ヲ逃ル、コトヲ得サルナリ

我カ國上古大臣大連輔弼ノ任ニ居ル孝德天皇ノ詔ニ夫君於天地之間而宰萬民者不可獨制要須臣翼ト云ヘリ天智天皇ノ時始メテ太政官ヲ置キ而來太政大臣左右大臣ハ政務ヲ統理シ大納言ハ參議シ旨ヲ宣ヘ中務卿ハ詔勅ヲ審署シ太政官ハ中務式部治部民部兵部刑部大藏宮内ノ八省ヲ統ヘ官制粗備ル其ノ後重臣專ラ太政ヲ關白シ宮禁ノ中藏人ノ小臣亦王命ヲ出納シ院宣内旨或ハ女官ノ文書ヲ以テ大事ヲ下行スルニ至ル而シテ朝綱全ク廢レタリ維新ノ初首メニ攝關及傳奏議奏ヲ廢シ又特ニ宮中ニ令シ内議請謁ノ禁ヲ嚴ニシ尋テ太政官制ヲ復ス明治二年七月左右大臣參議及

六省ヲ置ク四年太政大臣ヲ置ク六年十月參議諸省卿ニ兼任ス其ノ後又更革ヲ經十八年十二月ニ至テ太政大臣參議各省卿ノ職制ヲ廢シ更ニ內閣總理大臣及外務內務大藏陸軍海軍司法文部農商務遞信ノ十大臣ヲ以テ內閣ヲ組織シタリ蓋太寶ノ制ニ據ルトキハ太政官ハ諸省ノ上ニ冠首トシ諸省ハ其ノ下ノ分司タリ諸省卿ノ職ハ太政官符ヲ施行スルニ過キス而シテ事ヲ天皇ニ受ケ重責ニ任スル者ニ非ス維新ノ後歷次潤色ヲ經十八年ノ詔命ニ至リ大ニ內閣ノ組織ヲ改メ諸省大臣ヲシテ天皇ニ奉對シ各其ノ責ニ當ラシメ統フルニ內閣總理大臣ヲ以テシ一ハ以テ各大臣ノ職權ヲ重クシ擔任スル所ヲ知ラシメ二ハ以テ內閣ノ統一ヲ保チ多岐分裂ノ弊無ラシメタリ

歐洲ノ學者大臣ノ責任ヲ論スル者其ノ說一ナラスシテ各國ノ制

度亦各々趣ヲ異ニス或ハ政事ノ責ノ爲ニ特ニ糾彈ノ法ヲ設ケ下院
 告訴シテ上院之ヲ裁斷スルアリ英國或ハ大審院又ハ特ニ設ケタル
 政事法院ニ委ヌルニ裁斷ノ權ヲ以テスルアリ白國ハ下院告訴シ
 大審院裁斷ス
 澳國
ハ兩院告訴シ特置政事法院主トシテ政事罪ヲ裁斷シ併セテ刑事
 罪ヲ裁斷ス普國ハ憲法ニ正條アリテ而シテテ糾彈斷罪ノ別法未タ
 設ケサルヲ以テ或ハ政事ノ責ヲ以テ刑事ト分離シ裁決ノ結果ハ
 之ヲ實行セス
 罷免剝職ニ止マルトスルアリ米國及巴威里千
 八百四十八年法
 或ハ謀反贓賄濫費
 及違犯憲法ノ類ヲ指定シ特ニ大臣ノ責トスルアリ米普葡及佛千
 七
 百九十九年
千八百十四年ノ憲法○白耳義ノ國會ハ大或ハ君ニ對スルノ責任
 臣責任ノ刑名ヲ指定スルノ非ヲ論シタリ
トシ和蘭ノ一宰相ハ予ハ君主ニ對シ責任アリ或ハ人民即チ議院
 トシ雖人民ニ對シ責任ナシト主張シタリ
ニ對スルノ責任トス佛白葡等ノ國ノ憲法ハ國王ノ命令ハ大臣ノ
 責任糾治ヲ解クヘカラサルコトヲ揭ケタリ
 總テ之ヲ論スルニ憲法上ノ疑義ニシテ未タ一定ノ論決ヲ經サル
 コト未タ大臣責任ノ條ヨリ甚シキハアラサルナリ蓋之ヲ正理ニ

酌ミ之ヲ事情ニ考フルニ大臣ハ憲法ニ依リ輔弼ノ重局ニ當リ行
政上ノ強大ナル權柄ヲ掌有シ獨獎順贊襄ノ職ニ在ルノミナラス
又匡救矯正ノ任ニ居ル宜ク躬ヲ以テ責ニ任スヘキナリ若大臣ニ
シテ責ニ任スルノ義ナカラシメハ行政ノ權力ハ容易ニ法律ノ外
ニ踰越スルコトヲ得法律ハ徒ニ空文タルニ歸セムトス故ニ大臣
ノ責任ハ憲法及法律ノ支柱タル所以ナリ但シ大臣ノ責ハ其ノ執
ル所ノ政務ニ屬ス而シテ刑事ノ責ニ非サルナリ故ニ大臣其ノ職
ヲ愆ルトキハ其ノ責ヲ裁制スル者專ラ一國ノ主權者ニ屬セサル
ヘカラス唯之ヲ任スル者能之ヲ黜クヘシ大臣ヲ任シ又之ヲ黜ケ
又之ヲ懲罰スル者人主ニ非スシテ孰カ敢テ此ニ預ラム乎憲法既
ニ大臣ノ任免ヲ以テ君主ノ大權ニ屬シタリ其ノ大臣責任ノ裁制
ヲ以テ之ヲ議院ニ屬セサルハ固ヨリ當然ノ結果トス但シ議員ハ

質問ニ由リ公衆ノ前ニ大臣ノ答辯ヲ求ムルコトヲ得ヘク議院ハ君主ニ奏上シテ意見ヲ陳疏スルコトヲ得ヘク而シテ君主ノ材能ヲ器用スルハ憲法上其ノ任意ニ屬スト雖衆心ノ嚮フ所ハ亦其ノ採酌ノ一ニ洩レサルコト知ルヘキトキハ此レ亦間接ニ大臣ノ責ヲ問フ者ト謂フコトヲ得ヘシ故ニ我カ憲法ハ左ノ結論ヲ取ル者ナリ第一大臣ハ其ノ固有職務ナル輔弼ノ責ニ任ス而シテ君主ニ代リ責ニ任スルニ非サルナリ第二大臣ハ君主ニ對シ直接ニ責任ヲ負ヒ又人民ニ對シ間接ニ責任ヲ負フ者ナリ第三大臣ノ責ヲ裁判スル者ハ君主ニシテ人民ニ非サルナリ何トナレハ君主ハ國ノ主權ヲ有スレハナリ第四大臣ノ責任ハ政務上ノ責ニシテ刑事及民事ノ責ト相關涉スルコトナク又相牴觸シ及乗除スルコトナカルヘキナリ而シテ刑事民事ノ訴ハ之ヲ通常裁判所ニ付シ行政職

務ノ訴ハ之ヲ行政裁判所ニ付スヘキノ外政務責任ハ君主ニ由リ懲罰ノ處分ニ付セラレヘキナリ

内閣總理大臣ハ機務ヲ奏宣シ旨ヲ承ケテ大政ノ方向ヲ指示シ各部統督セサル所ナシ職掌既ニ廣ク責任從テ重カラサルコトヲ得ス各省大臣ニ至テハ其ノ主任ノ事務ニ就キ各別ニ其ノ責ニ任スル者ニシテ連帶ノ責任アルニ非ス蓋總理大臣各省大臣ハ均ク天皇ノ選任スル所ニシテ各相ノ進退ハ一ニ勅旨ニ由リ首相既ニ各相ヲ左右スルコト能ハス各相亦首相ニ繫屬スルコトヲ得サレハナリ彼ノ或國ニ於テ内閣ヲ以テ團結ノ一体トナシ大臣ハ各個ノ資格ヲ以テ參政スルニ非サル者トシ連帶責任ノ一點ニ偏傾スルカ如キハ其ノ弊ハ或ハ黨援聯結ノ力遂ニ以テ天皇ノ大權ヲ左右スルニ至ラムトス此レ我カ憲法ノ取ル所ニ非サルナリ若夫レ國

ノ内外ノ大事ニ至テハ政府ノ全局ニ關係シ各部ノ專任スル所ニ
非ス而シテ謀猷措畫必各大臣ノ協同ニ依リ互相推諉スルコトヲ
得ス此ノ時ニ當テ各大臣ヲ舉ケテ全體責任ノ位置ヲ取ラサルヘ
カラサルハ固ヨリ其ノ本分ナリ

大臣ノ副署ハ左ノ二様ノ効果ヲ生ス一ニ法律勅令及其ノ他國事
ニ係ル詔勅ハ大臣ノ副署ニ依テ始メテ實施ノ力ヲ得大臣ノ副署
ナキ者ハ從テ詔命ノ効ナク外ニ付シテ宣下スルモ所司ノ官吏之
ヲ奉行スルコトヲ得サルナリ二ニ大臣ノ副署ハ大臣擔當ノ權ト
責任ノ義ヲ表示スル者ナリ蓋國務大臣ハ内外ヲ貫流スル王命ノ
溝渠タリ而シテ副署ニ依テ其ノ義ヲ昭明ニスルナリ但シ大臣政
事ノ責任ハ獨法律ヲ以テ之ヲ論スヘカラス又道義ノ關ル所タラ
サルヘカラス法律ノ限界ハ大臣ヲ待ツ爲ノ單一ナル範圍トスル

ニ足ラサルナリ故ニ朝廷ノ失政ハ署名ノ大臣其ノ責ヲ逃レサル
コト固ヨリ論ナキノミナラス即チ議ニ預カルノ大臣ハ署名セサ
ルモ亦其ノ過ヲ負ハサルコトヲ得サルヘシ若專ラ署名ノ有無ヲ
以テ責任ノ在ル所ヲ判セムト欲セハ形式ニ拘リ事情ニ戻ル者タ
ルコトヲ免レス故ニ副署ハ以テ大臣ノ責任ヲ表示スヘキモ副署
ニ依テ始メテ責任ヲ生スルニ非サルナリ

太寶公式令ニ據ルニ詔書案成リ御畫日訖テ中務卿ニ給フ其ノ御
畫日アル者ハ之ヲ中務省ニ留メテ案ト爲シ別ニ一通ヲ寫シ中務
卿宣中務大輔奉中務少輔行ト署シ太政官ニ送ル太政官ニ於テ太
政大臣左右大臣及大納言四人署名シテ覆奏シ外ニ付シテ施行セ
ムト請フ乃御畫可シ其ノ御畫可アル者ハ官ニ留メテ案ト爲シ更
ニ謄寫シテ天下ニ布告ス蓋審署ノ式尤慎重ヲ加ヘタリ維新ノ後

明治四年七月勅書ニ加名鈴印スルヲ以テ太政大臣ノ任トス但シ
宣布ノ詔多クハ奉勅ノ署名ナキハ草創ノ際未タ一定ニ至ラサリ
シナリ十四年十一月各省卿其ノ主管ノ事務ニ屬スル法律規則及
布達ニ署名スルノ制ヲ定ム十九年一月副署ノ式ヲ定ム公文施行
ノ法是ニ至テ蓋大ニ備ハレリ

第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依
リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

恭テ按スルニ天皇ハ既ニ内閣ニ倚テ以テ行政ノ揆務ヲ總持シ又
樞密顧問ヲ設ケテ以テ詢謀ノ府トシ聰明ヲ裨補シテ偏聽ナキヲ
期セムトス蓋内閣大臣ハ内外ノ局ニ當リ敏給捷活以テ事機ニ應
ス而シテ優裕靜暇思ヲ潜メ慮ヲ凝シ之ヲ今古ニ考ヘ之ヲ學理ニ
照シ永圖ヲ籌畫シ制作ニ從事スルニ至テハ別ニ專局ヲ設ケ練達

學識其ノ人ヲ得テ之ニ倚任セサルヘカラス此レ乃他ノ人事ト均ク一般ノ常則ニ從ヒ二種ノ要素各其ノ業ヲ分ツナリ蓋君主ハ其ノ天職ヲ行フニ當リ謀リテ而シテ後之ヲ斷セムトス即チ樞密顧問ノ設實ニ內閣ト俱ニ憲法上至高ノ輔翼タラサルコトヲ得ス若夫レ樞密顧問ニシテ聖聰ヲ啓沃シ偏セス黨セス而シテ又能ク問疑ヲ剖解スルノ補益ヲ爲スニ至テハ果シテ憲法上ノ機關タルニ負カサルヘク且大ニシテハ緊急命令又ハ戒嚴令ノ發布ニ當リ小ニシテハ會計上法規ノ外ニ臨時處分ノ必要アルノ類之ヲ諮詢シテ然後ニ決行スルハ即チ爲政ノ慎重ヲ加フル所以ニシテ此ノ場合ニ於テハ樞密顧問ハ憲法又ハ法律ノ一ノ屏翰タルノ任ニ居ルヘキナリ樞密顧問ノ職是ノ如キノ重キナリ故ニ凡ソ勅令ニシテ顧問ノ議ヲ經ル者ハ其ノ上諭ニ於テ之ヲ宣言スルヲ例式トス但

シ樞密顧問ハ至尊ノ諮詢アルヲ待テ始メテ審議スルコトヲ得而シテ其ノ意見ノ採擇ハ亦皆一ニ至尊ノ聖裁ニ由ルノミ
樞密顧問ノ職守ハ可否ヲ獻替シ必忠誠ヲ以テシ隱避スル所ナク而シテ審議ノ事ハ細大トナク至尊ノ特別ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ公洩スルコトヲ得ス蓋樞機密勿ノ府ハ人臣外ニ向テ譽ヲ求ムルノ地ニ非サルナリ

第五章 司法

司法權ハ法律ノ定ムル所ニ依遵シ正理公道ヲ以テ臣民權利ノ侵害ヲ回復シ及刑罰ヲ判斷スルノ職司トス古ヘ政治簡朴ナルニ當テ各國政廳ノ設未タ司法行政ノ別アラサリシハ史籍ノ證明スル所ナリ其ノ後文化彌進ミ人事益繁キニ至テ始メテ司法ト行政ト

ノ間ニ職司ヲ分割シ其ノ構制ヲ殊ニシ其ノ畛域ヲ慎ミ互ニ相干
涉セス以テ立憲ノ政體ニ至大ノ進歩ヲ成サシメタリ

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁

判所之ヲ行フ

裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

行政ト司法ト兩權ノ區別ヲ明ニスル爲ニ茲ニ之ヲ約説スヘシ曰
行政ハ法律ヲ執行シ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ人民ノ幸福ヲ
増進スル爲ニ便宜ノ經理及處分ヲ爲ス者ナリ司法ハ權利ノ侵害
ニ對シ法律ノ規準ニ依リ之ヲ判斷スル者ナリ司法ニ在テハ專ラ
法律ニ從屬シ便益ヲ酌量セス行政ニ在テハ社會ノ活動ニ從ヒ便
益ト必要トニ依リ法律ハ其ノ範圍ヲ限制シテ區域ノ外ニ濫越ス
ルヲ防クニ止マルノミ行政司法ノ兩權其ノ性質ヲ殊ニスルコト

此ノ如シ故ニ行政ノ官アリテ司法ノ職ヲ分ツコトナカリセハ各個人ノ權利ハ社會ノ便益ノ爲ニ隨時移動スルコトヲ免レシテ而シテ其ノ流弊ハ遂ニ權勢威力ノ侵犯ヲ被ルニ至ラントス唯然リ故ニ裁判ハ必法律ニ依ル法律ハ裁判ノ單純ノ準繩タリ而シテ又必裁判所ニ由リ之ヲ行フ但シ君主ハ正理ノ源泉ニシテ司法ノ權亦主權ノ發動スル光線ノ一タルニ外ナラス故ニ裁判ハ必天皇ノ名ニ於テ宣告シ以テ至尊ノ大權ヲ代表ス

裁判所ノ構成ハ必法律ヲ以テ之ヲ定メ行政ノ組織ト別異スル所アラシム而シテ司法ノ官ハ實ニ法律ノ基址ニ立チ不羈ノ地位ヲ有ツ者タリ

我カ中古ノ制刑部省ノ設ハ他ノ各省ト俱ニ太政官ニ隸屬シ而シテ刑部卿ハ鞠獄^ク定刑^メ名決^シ疑讞^ヲ良賤^ノ名籍囚禁債負ノ事ヲ掌ル判事

ハ刑部卿ニ屬シ案覆^レ鞫^ル狀斷^ル定刑名判^ル諸^ノ爭訟事ヲ掌ル是レ民刑二
事ヲ併セテ之ヲ一省ニ總ヘタリ武門ノ盛ナルニ至テ大柄一タヒ
移リ檢斷ノ權檢非違使ニ歸シ武斷ヲ以テ政ヲ爲シ封建ノ際概テ
其ノ陋習ヲ因襲シ越訴ヲ以テ大禁ト爲ルニ至レリ維新ノ初刑法
官ヲ置キ司法ノ權復天皇ノ統攬ニ歸ス四年始メテ東京裁判所ヲ
置ク裁判ノ爲ニ專廳ヲ設クルハ此レヲ以テ始トス是歲大藏省ノ
聽訟事務ヲ以テ改メテ司法省ニ屬ス五年開市場裁判所ヲ設ク嗣
テ司法裁判府縣裁判區裁判ノ各等裁判ヲ置キ始メテ控訴覆審ヲ
許ス八年大審院ヲ置キ以テ法憲ノ統一ヲ主持スルノ所トシ司法
卿ノ職制ヲ定メテ檢務ヲ統理シ裁判ニ干預セサル者トス是ヨリ
後漸次釐革スル所アリ以テ裁判獨立ヲ期スルノ針路ヲ取リタリ
是ヲ司法事務沿革ノ概略トス

歐洲前世紀ノ末ニ行ハレタル三權分立ノ說ハ既ニ學理上及實際
上ニ排斥セラレタリ而シテ司法權ハ行政權ノ一支派トシテ均ク
君主ノ統攬スル所ニ屬シ立法權ニ對シテ之ヲ謂フトキハ行政權
ハ概括ノ意義ヲ有チ司法ハ行政ノ一部タルニ過キス更ニ行政權
中ニ就キ職司ノ分派ヲ論スルトキハ又司法ト行政ト各其ノ一部
ヲ占ムル者タリ此レ蓋近時國法學者ノ普通ニ是認スル所ニシテ
茲ニ詳論スルヲ假ラサル者ナリ但シ君主ハ裁判官ヲ任命シ裁判
所ハ君主ノ名義ヲ以テ裁判ヲ宣告スルニ拘ラス君主自ラ裁判ヲ
施行セス不羈ノ裁判所ヲシテ專ラ法律ニ依遵シ行政威權ノ外ニ
之ヲ施行セシム是ヲ司法權ノ獨立トス此レ乃三權分立ノ說ニ依
ルニ非スシテ仍不易ノ大則タルコトヲ失ハス

第五十八條 裁判官ハ法律ニ依リ定メタル資格ヲ具

フル者ヲ以テ之ニ任ス

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職ヲ免セラル、コトナシ

懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

裁判官ハ法律ヲ主持シ人民ノ上ニ衡平ノ柄ヲ執ラムトス故ニ專科ノ學識及經驗ハ裁判官タルノ要件タリ而シテ臣民ノ倚テ以テ其ノ權利財産ヲ託スルハ亦實ニ其ノ法律上正當ノ資格アルヲ賴マスムハアラス故ニ本條第一項ハ法律ヲ以テ其ノ資格ヲ定ムヘキコトヲ保明シタリ

裁判ノ公正ヲ保タムト欲セハ裁判官ヲシテ威權ノ干涉ヲ離レ不羈ノ地ニ立チ勢位ノ得失ト政論ノ冷熱ヲ以テ牽束ヲ受ルコトナカラシムヘシ故ニ裁判官ハ刑法又ハ懲戒裁判ノ判決ニ由リ罷免

セラル、ヲ除ク外終身其ノ職ニ在ル者トス而シテ裁判官ノ懲戒
條規ハ又法律ヲ以テ之ヲ定メ裁判所ノ判決ヲ以テ之ヲ行ヒ行政
長官ノ干渉スル所トナラス此レ憲法ニ於テ特ニ裁判官ノ獨立ヲ
保明スル所ナリ

共ノ他停職非職轉任老退ニ於ケル詳節ハ總テ法律ノ掲クル所タ
リ

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧

秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ
又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコト
ヲ得

裁判ヲ公開シ公衆ノ前ニ於テ對理口審スルハ人民ノ權利ニ對シ
尤効力アルノ保障タリ裁判官ヲシテ自ラ其ノ義務ヲ尊重シ正理

公道ノ代表ト爲ラシムルハ蓋亦公開ノ助ニ倚ル者少シトセサルナリ我カ國從來白洲裁判ノ習久シク慣用スル所タリシニ明治八年以來始メテ對審判決ノ公開ヲ許シタルハ實ニ司法上ノ一大進歩タリ

刑事ノ審理ニ豫審アリ對審アリ此ニ對審ト謂ヘハ豫審ハ其ノ中ニ在ラサルナリ安寧秩序ヲ害ストハ内亂外患ニ關ル罪及嘯聚教唆ノ類人心ヲ煽起刺衝スル者ヲ謂フナリ風俗ヲ害ストハ内行ノ事之ヲ公衆ノ視聽ニ暴ストキハ醜辱ヲ流シ風教ヲ傷ル者ヲ謂フナリ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アリト謂ヘルハ其ノ果シテ害アルト然ラサルトヲ判定スルハ專ラ裁判所ノ所見ニ任スルナリ法律ニ依ルト謂ヘルハ治罪法訴訟法ノ明文ニ依ルナリ裁判所ノ決議ヲ以テト謂ヘルハ法律ノ明文ナシト雖亦裁判所ノ議ヲ以

テ之ヲ決スルコトヲ得ルナリ對審ノ公開ヲ停ムト謂フトキハ判
決宣告ハ仍必之ヲ公開スルナリ

第六十條 特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ

法律ヲ以テ之ヲ定ム

陸海軍人ノ軍法會議ニ屬スルハ即チ普通ナル司法裁判所ノ外ニ
於ケル特別裁判所ノ管轄ニ屬スルモノトス其ノ他商工ノ爲ニ商
工裁判所ヲ設クルノ必要アルニ至ラハ亦普通ノ民事裁判ノ外ニ
特別ノ管轄ニ屬スルモノトス凡ツ此レ皆法律ヲ以テ之ヲ規定ス
ヘクシテ命令ヲ以テ法律ノ除外例ヲ設クルコトヲ得ス

若夫レ法律ノ外ニ於テ非常裁判ヲ設ケ行政ノ勢威ヲ以テ司法權
ヲ侵蝕シ人民ノ爲ニ司直ノ府ヲ褫奪スルカ如キハ憲法ノ之ヲ認
メサル所ナリ

第六十一條 行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害

セラレタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定
メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁
判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラス

行政裁判ハ行政處分ニ對スルノ訟ヲ裁判スルノ謂ナリ蓋法律既
ニ臣民ノ權利ニ向テ一定ノ限界ヲ爲シ以テ之ヲ安固ナラシメタ
リ而シテ政治ノ機關タル者亦之ニ服從セサルコトヲ得ス故ニ行
政官廳ニシテ其ノ職務上ノ處置ニ依リ法律ニ違ヒ又ハ職權ヲ超
エ臣民ノ權利ヲ傷害スルコトアルニ當リテハ行政裁判所ノ斷定
ヲ受クルコトヲ免レス

抑訴訟ヲ判定スルハ司法裁判所ノ職任トス而シテ別ニ行政裁判
所アルハ何ツヤ司法裁判所ハ民法上ノ爭訟ヲ判定スルヲ以テ當

然ノ職トシ而シテ憲法及法律ヲ以テ委任サレタル行政官ノ處分
ヲ取消スノ權力ヲ有セサルナリ何トナレハ司法權ノ獨立ヲ要ス
ルカ如ク行政權モ亦司法權ニ對シ均ク其ノ獨立ヲ要スレハナリ
若行政權ノ處置ニシテ司法權ノ監督ヲ受ケ裁判所ヲシテ行政ノ
當否ヲ判定取舍スルノ任ニ居ラシメハ即チ行政官ハ正ニ司法官
ニ隸屬スル者タルコトヲ免レス而シテ社會ノ便益ト人民ノ幸福
ヲ便宜ニ經理スルノ餘地ヲ失フヘキナリ行政官ノ措置ハ其ノ職
務ニ依リ憲法上ノ責任ヲ有シ從テ其ノ措置ニ抗拒スル障害ヲ除
去シ及其ノ措置ニ由リ起ル所ノ訴訟ヲ裁定スルノ權ヲ有スヘキ
ハ固ヨリ當然ニシテ若此ノ裁定ノ權ヲ有セサルトキハ行政ノ効
力ハ麻痺消燼シテ憲法上ノ責任ヲ盡スニ由ナカルヘキナリ此レ
司法裁判ノ外ニ行政裁判ノ設ヲ要スル所以ノ一ナリ行政ノ處分

ハ以テ公益ヲ保持セムトス故ニ時アリテ公益ノ爲ニ私益ヲ枉ル
コトアルハ亦事宜ノ必要ニ出ル者アリ而シテ行政ノ事宜ハ司法
官ノ通常慣熟セサル所ニシテ之ヲ其ノ判決ニ任スルハ危道タル
コトヲ免レス故ニ行政ノ訴訟ハ必行政ノ事務ニ密切練達ナルノ
人ヲ得テ以テ之ヲ聽理セサルコトヲ得ス此レ司法裁判ノ外ニ行
政裁判ノ設ヲ要スル所以ノ二ナリ但シ行政裁判所ノ構成ハ亦必
法律ヲ以テ之ヲ定ムルヲ要スルコト司法裁判所ト異ナルコトナ
キナリ

明治五年司法省第四十六號達ハ凡ソ地方官ヲ訟フル者皆裁判所
ニ於テセシメタリシニ地方官吏ヲ訟フルノ文書法廷ニ蝟集シ俄
ニ司法官行政ヲ牽制スルノ弊端ヲ見ルニ至レリ七年第二十四號
ノ達ハ始メテ行政裁判ノ名稱ヲ設ケ地方官ヲ訟フル者ハ司法官

ニ於テ具狀シテ太政官ニ申稟セシム是レ姑ク一時ノ弊ヲ救フニ過キスシテ而シテ行政裁判所ノ構成ハ仍之ヲ將來ニ期シタリ本條ニ行政官廳ノ違法ノ處分ト謂フトキハ法律又ハ正當ナル職權ニ依ルノ處分ハ之ヲ訴フルコトヲ得サルコト知ルヘキナリ例之ハ公益ノ爲ニ所有ヲ制限スルノ法律ニ依ル處分ヲ受クル者ハ之ヲ訴フルコトヲ得サルナリ本條ニ又權利ヲ傷害セラレタリトスル者ト謂フトキハ單ニ利益ヲ傷害セラレタリトスル者ハ請願ノ自由アリテ行政訴訟ノ權ナキコト知ルヘキナリ例之ハ鐵道ヲ開クノ工事アリ行政官ハ定規ノ手續ニ遵由シテ其ノ線路ヲ定メタルニ地方ノ人民他ノ線路ヲ取ルノ利益アリトシテ之ヲ爭フ者アラム此レ其ノ爭ハ單ニ利益ニ屬シテ權利ニ屬セサルカ故ニ之ヲ當該官廳ニ請願スルコトヲ得ルモ之ヲ行政裁判ニ訴フルコト

ヲ得サルナリ

第六章 會計

會計ハ國家ノ歲出歲入ヲ整理スル所ノ行政ノ要部ニシテ臣民ノ生計ト密切ノ關鍵ヲ爲ス者ナリ故ニ憲法ハ殊ニ之ヲ慎重シテ帝國議會ノ協賛及監督ノ權限ヲ明確ニス

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

但シ報償ニ屬スル行政上ノ手數料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス

國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協賛ヲ經

ヘシ

新ニ租稅ヲ課スルニ當テ議會ノ協賛ヲ必要トシ之ヲ政府ノ專行ニ任セサルハ立憲政ノ一大美果トシテ直接ニ臣民ノ幸福ヲ保護スル者ナリ蓋既ニ定マレル現稅ノ外ニ新ニ徵額ヲ起シ及稅率ヲ變更スルニ當テ適當ノ程度ヲ決定スルハ專ラ議會ノ公論ニ倚賴セサルコトヲ得ス若此ノ有効ナル憲法上ノ防範ナカリセハ臣民ノ富資ハ其ノ安固ヲ保證スルコト能ハサラムトス

第二項報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金トハ各個人ノ要求ニ由リ又ハ各個人ニ利益ヲ予フル爲ノ政府ノ事業又ハ事務ニ對シ上納セシムル者ニシテ普通ノ義務トシテ賦課スル所ノ租稅ト其ノ性質ヲ殊ニスル者ヲ謂フ即鐵道切符料倉庫料學校授業料ノ類ハ行政命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得ヘク必シモ法

律ニ依ルヘキノ限ニ在ラサル者トス但シ行政上ノ手數料ト謂フ
 トキハ司法上ノ手數料ト其ノ類ヲ異ニスルコト知ルヘキナリ
 第三項國債ハ將來ニ國庫ノ負擔義務ヲ約束スル者ナリ故ニ新ニ
 國債ヲ起スニハ必議會ノ協賛ヲ取ラサルヘカラス豫算ノ効力ハ
 一ノ會計年度ニ限ル故ニ豫算ノ外ニ涉リ將來ニ國庫ノ負擔タル
 ヘキ補助保證及其ノ他ノ契約ヲ爲スハ皆國債ニ同シク議會ノ協
 賛ヲ要スルナリ

第六十三條 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メ
 サル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

前條已ニ新ニ課スルノ租稅ハ必法律ヲ以テ之ヲ定ムヘキコトヲ
 保明シタリ而シテ本條ハ現行ノ租稅ハ嗣後更ニ新定ノ法律ヲ以
 テ之ヲ改正スルノ事アラサル限ハ總テ従前ノ舊制及舊稅率ニ依

遵シテ之ヲ徵收スヘキコトヲ定ム蓋國家ハ其ノ必要ノ經費ニ供
スル爲ニ一定ノ歲入アルヲ要ス故ニ現行租稅ニ屬スル國家ノ歲
入ハ憲法ニ由テ移動セサルノミナラス憲法ハ更ニ明文ヲ以テ之
ヲ確定シタリ

(附記) 之ヲ歐洲各國ニ參考スルニ毎一年ニ徵稅ノ全部ヲ議會
ノ議ニ付スルハ其ノ實多クハ無用ノ形式タルニ拘ラス一般ニ
理論ノ貴重スル所トナリ或國ノ憲法ハ租稅議決ノ効力ハ一年
ニ限り明文ヲ以テ之ヲ更新スルニ非サレハ一年以外ニ存立セ
サルコトヲ掲ケタリ今其ノ由テ來ル所ヲ推究スルニ其ノ一ハ
歐洲中古各國ノ君家ハ家事ヲ以テ國務ト相混シ家產ヲ以テ國
費ニ充テ私邑ヲ封殖シテ其ノ租入ヲ取り以テ文武ノ需要ニ供
給シタリシニ其ノ後常備兵ノ設軍需鉅大ナルト及宮室園囿ノ

費トニ因リ内庫缺乏スルニ至リ國中ノ豪族ヲ召集シ其ノ貢
 獻ヲ徵シ以テ歳費ヲ補給スルノ方法ヲ取リタリ此レ乃歐洲各
 國ニ於ケル租税ノ起源ハ實ニ人民ノ貢獻寄附タルニ過キス
瓦 敎
 堡憲法第百九條ニ王室財産ノ收入ニシテ足ラサルトキハ租
 税ヲ徵收シテ國費ヲ支給スヘシト云ヘルハ其ノ一證ナリ故
 ニ國民ハ王家饜クコト無キノ徵求ヲ防制スル爲ニ政府ヲシテ
 其ノ必要ヲ證明シ以テ國民ノ承諾ヲ經ルヲ要セシメ承諾ナケ
 レハ租税ナシト謂ヘルノ約束ヲ以テ國憲ノ大則トスルニ至レ
 リ此レ歷史上ノ沿革ヨリ來ル者ナリ其ノ二ハ主權在民ノ主義
 ニ據リ國民ハ全部ノ租税ニ對シ專ラ自由承諾ノ權ヲ有シ國民
 ニシテ租税ヲ承諾セサルトキハ政府ハ其ノ存立ヲ失フヲ以テ
 自然ノ結果トスヘシト謂ヘル極端ノ論ヨリ來ル者ナリ抑此ノ
 歷史上ノ遺傳ト架空ノ理論トハ兩々抱合シテ以テ各國ノ憲法

ノ上ニ強大ナル勢力ヲ有シ牢固ニシテ破ルヘカラサルニ至レ
 ルニ拘ラス顧ミテ其ノ實際如何ト問フニ至テハ英國ニ在テハ
 地租、關稅、物產稅、印紙稅ハ常久ニ之ヲ徵收シ固定資金ニ拂ヒ込
 ム者計リ歲入ノ全部七分ノ六ニ居ル「ダイシ」氏ニ據ルニ據ル百八十四年ノ統計ニ據ル
ニ據ルニ據ル萬磅ハ全部八千七百二十萬五千八百八十四磅ニシテ其ノ千四百
ニ據ルニ據ル萬磅ハ毎年議決ニ依リ徵收スル者トシ其ノ七千三百萬磅餘ハ
ニ據ルニ據ル經常法ニ依リ徵收ス 此レ乃昔日ノ因襲ト及法律ノ効力ニ依リ經常不動
 ノ歲入トシ毎年ニ議ニ付スルコトヲ要セサル者ナリ普國ハ憲
 法第百九條ニ依リ現稅ハ舊ニ依ルノ條規ヲ實行シタリ彼ノ理
 論ノ巢窟タル所ノ佛國ニ於テモ其ノ著述者ノ言ニ據ルニ毎年
 租稅ヲ議スルノ原則ハ依違ノ間ニ之ヲ施行スルニ過キス「ボウ」
「ボウ」氏「ボウ」財政學第三版第二卷而シテ其ノ殊ニ毎年討議シテ以テ稅率
 七十五頁及七十六頁ヲ定ムル所ノ直稅ノ如キモ亦既ニ其ノ不便ヲ論スル者アリ蓋

之ヲ立國ノ原理ニ求ムルニ國家ノ成立ハ永久ニシテ假設ノ物
ニ非ス故ニ國家其ノ永久ノ存立ヲ保ツ爲ノ經費ノ大局ハ每一
年ニ移動ヲ爲スヘキニ非ス而シテ何人モ及何等ノ機關モ必要
經費ノ源ヲ杜塞シテ以テ國家ノ成立ヲ戕害スルノ權利ナカル
ヘキナリ彼ノ歐洲各國ノ中古ノ制度ノ如キハ國家常存ノ資源
ハ王室ノ財産ニ在テ租稅ニ在ラス故ニ人民ハ隨意ニ納稅ノ諾
否ヲ毎一年ニ限ルコトヲ得ヘキモ近世國家ノ原理漸ク論定ヲ
得ルニ至テハ國家ノ經費ハ租稅ノ正供ニ資ルヘク而シテ殊ニ
國家ノ存立ニ必要ナル經常稅ノ徵收ハ專ラ國權ニ據ル者ニシ
テ人民ノ隨意ナル獻饋ニ因ル者ニ非サルコト既ニ疑ヲ容ルヘ
キノ餘地アルコトナキナリ

我カ國上古ヨリ國家ノ經費ハ之ヲ租稅ニ取り中古三稅租庸調ノ

法ヲ定メ國民ヲシテ均ク納稅ノ義務アラシメ正供ノ外ニ徵求
ノ路ヲ開クコトヲ假ラス現在各種稅法皆常經アリテ毎年移動
ノ方法ニ由ル者アルコトナシ今憲法ニ於テ現行稅ヲ定メテ經
常稅トナシ其ノ將來ニ變更アルヲ除ク外總テ舊ニ依リ徵收セ
シムルハ之ヲ國體ニ原ツケ之ヲ理勢ニ酌ミ紛更ヲ容レサル者
ナリ

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國
議會ノ協賛ヲ經ヘシ

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出
アルトキハ後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

豫算ハ以テ會計年度ノ爲ニ歲出歲入ヲ豫定シ行政機關ヲシテ其
ノ制限ニ準據セシメムトス國家ノ經費ニ豫算ヲ設クルハ財政ヲ

整理スルノ初歩發軔タリ而シテ豫算ヲ議會ニ付シ其ノ協賛ヲ經及豫算ニ依リ支費スルノ後仍超過支出及豫算外ノ支出ヲ以テ議會ノ監督ニ付シ事後承諾ヲ求ムルニ至テハ之ヲ立憲制ノ成果トスルニ足ル者ナリ

豫算ノ事太寶ノ令ニ見ル所ナシ德川氏ノ時各官衙ニ定額アリテ而シテ豫算ナシ維新ノ後仍舊慣ニ因リ國庫又ハ各廳ニ於テ逐次出納スルニ止マル明治六年大藏省ニ於テ始メテ歲入出見込會計表ヲ作り太政大臣ニ呈出ス我カ政府ノ豫算ヲ以テ公文トスルハ此ヲ以テ始トス七年ニ又同年度ノ豫算會計表ヲ作り嗣後逐年ニ豫算ノ科目及様式ヲ改良シ十四年ニ會計法ヲ頒布スルニ至テ稍整頓ニ就キ十七年ニ歲入出豫算條規ヲ施行シ益成緒ヲ見ルコトヲ得タリ十九年ニ勅令ヲ以テ豫算ヲ發布ス此ヲ式ニ依リ豫算ヲ

公布スルノ初トス而シテ豫算ノ制ハ實ニ會計上必要ノ準繩トナルニ至レリ木條ハ更ニ進ミテ豫算ヲ議會ニ付スルノ制ヲ取ラムトス蓋豫算ヲレテ正當明確ナラシメ又其ノ正當明確ナルコトヲ公衆ニ證明シ及行政官衙ヲレテ豫算ヲ遵守スルノ必然ノ義務アラシムルハ之ヲ議會ニ付スルヨリ最モ緊切ナル効力ヲ見ルニ若クハナカルヘシ

茲ニ辯明ヲ要スル者ハ各國ニ於テ豫算ヲ以テ一ノ法律ト認メタルコト是ナリ抑豫算ハ單ニ一年ニ向テ行政官ノ遵守スヘキ準繩ヲ定ムル者ナルニ過キス故ニ豫算ハ特別ノ性質ニ因リ議會ノ協賛ヲ要スル者ニレテ本然ノ法律ニ非サルナリ唯然リ故ニ法律ハ以テ豫算ノ上ニ前定ノ効力ヲ有スヘク而シテ豫算ハ以テ法律ヲ變更スルノ作用ヲ爲スコトヲ得ス豫算ヲ以テ法律ヲ變更スルハ

豫算議定權ノ適當ナル範圍ヲ越ユル者ナリ彼ノ各國ニ於テ豫算ヲ以テ法律ト稱ヘタルハ或ハ豫算ノ議定ヲ過重シテ議院無限ノ權トスルニ因リ又或ハ凡ソ議院ノ議ヲ經ル者ハ總テ法律ヲ以テ稱呼スルノ謬ヲ蹈ムニ因ルニ過キス抑法律ハ必議會ノ議ヲ經ト謂フコトヲ得ヘシ而シテ議會ノ議ヲ經ル者ハ必法律ト名クト謂フコトヲ得サルナリ何トナレハ議會ノ承諾ヲ經ルモ其ノ特別ノ一事ニ限り普通ニ遵由セシムルノ條則ニ非サル者ハ固ヨリ法律ト其ノ性質ヲ殊ニスレハナリ

第二項歳出ノ豫算ノ款項ニ超過スル者アルカ又ハ豫算ノ外ニ生シタル費用ノ支出ヲナシタルトキハ議會ノ事後承諾ヲ求ムルハ政府已ムヲ得サルノ處分ニ於テ仍議會ノ監督ヲ要スルナリ蓋精確ナル豫算ハ過剩アルヨリモ寧不足アルハ往々避クヘカラサ

ルノ事實ナリ各大臣ハ豫算ニ拘束セラレテ既ニ不要トナリタル
豫定ノ政費ヲ支出スルノ責ヲ有セサルカ如ク已ムヲ得サルノ必
要ニ由リ生シタル豫算超過及豫算ノ外ノ支出ヲ施行スルモ亦憲
法ノ禁スル所ニ非ス何トナレハ大臣ノ職務ハ獨豫算ニ關ル國會
ノ協賛ニ由リ指定セララル、ノミニ非スシテ寧至高ノ模範タル憲
法及法律ニ依リ指定セラル、者ナレハナリ故ニ憲法上ノ權利又
ハ法律上ノ義務ヲ履踐スル爲ニ必要ナル供需アルニ際シ大臣ハ
豫算ニ不足ヲ生シ又ハ豫算中ニ正條ナキノ故ヲ以テ其ノ政務ヲ
廢スルコトヲ得ス而シテ已ムヲ得サルノ超過及豫算外ノ支出ハ
仍適法ノ事タルコトヲ失ハサルナリ抑適法ノ事ニシテ猶事後承
諾ヲ要スルハ何ソ乎行政ノ必要ト立法ノ監督トヲシテ兩々並行
互相調和セシムル所以ナリ蓋國家モ亦一個人ト同ク濫費冗出ノ

情弊アルハ免レサルノ弱點タルカ故ニ豫算ノ議決款項ヲ細密ニ
 履行スルハ此ヲ以テ政府ノ重要義務トセサルコトヲ得ス英國千
八十九年三月三十日ノ衆議院ノ議決ニ云國會經費ノ科額ヲ決定シ
百タルトキハ其ノ經費ヲシテ其ノ目的ノ爲ニ委任セラレタル額ニ
四超過セサラシムルコトニ注意スルハ而シテ已ムヲ得サルノ超過
 責任及監督ニ當ル各省ノ義務ナリト而シテ已ムヲ得サルノ超過
 支出及豫算外支出アルハ異例ノ事トシ若議會ニ於テ濫費違法ノ
 情弊ヲ發見シ其ノ必要ナルコトヲ認メサルトキハ以テ法律上ノ
 爭議ヲ提起スルコトヲ得サルモ以テ政事上ノ問題ヲ媒介スルコ
 トヲ得ヘシ但シ財政上政府ノ既ニ支出シタル費額及政府ノ爲ニ
 生シタル義務ニ付テハ其ノ結果ヲ變動スルコト能ハサルノミ
 豫算款項ノ超過ハ議會ニ於テ議決セル定額ヲ超エ支出シタルヲ
 謂フ豫算ノ外ニ生シタル支出トハ豫算ニ設ケタル款項ノ外ニ豫
 見セサルノ事項ノ爲ニ支出シタルヲ謂フ普國檢査院章程第十九
條ニ云憲法第四百四條ニ

謂ヘル豫算超過トハ豫算ニ於テ各項ノ流用ヲ許シ此ノ項ノ少支出ヲ以テ彼ノ項ノ多支出ヲ補充シ得ルモノヲ除ク外第九十九條ニ從ヒ豫算ノ確定シタル會計豫算ノ各款各項又ハ議院ノ承認シタル特別豫算ノ各項ニ違ヘル多額ノ支出ヲ謂フ豫算超過及豫算外此ノ支出ノ憲法第四百四條ノ遺漏ヲ補注シ并ニ其ノ承諾ヲ受クヘシ豫算外ノ支出ニ及ホス者ナリ

(附記)

豫算超過ノ支出ハ各國ノ會計ニ於テ實際ノ免レサル所ナリ英國千八百八十五年收入支出監督條規トシテ議院ノ議決スル所ニ依ルニ毎年ノ決算ハ最後ニ下院ノ決算委員ニ於テ之ヲ審査シ各科目ニ付議決ノ金額ニ超過シタル支費アルトキハ立法ノ認可ヲ經ヘシト云ヘリ「コックス氏ニ據ル氏ハ又其ノ事豫算調製ノ當時ニ在リテハ十分餘裕アルカ如キモ實際ニ缺乏告ケケル年度ニ於テ不足ヲ補給スルノ費目アルハ少シトセスト蓋英國ハ事後承諾及補充議普國ハ事後承諾ノ方法ヲ取り而シテ憲法ニ之ヲ明言セリ伊國ハ半ハ現年度ニ於ケル豫算修正

ノ方法ヲ取り半ハ事後承諾ノ方法ヲ取レリ千八百六十佛國ハ
 豫算ニ定メタル經費ニシテ當然ノ理由ニ因リ不足ヲ生シタル
 者ハ補充費トシ豫見セサル事項又ハ豫算ニ定メタル事務ニシ
 テ既定ノ區域ノ外ニ擴張スル者ハ非常費トシ補充費非常費ハ
 皆法律ヲ以テ之ヲ許可スヘキ者トシ國會閉會ノ場合ニ於テハ
 參議院ノ發議ニ由リ內閣會議ヲ經命令ヲ以テ假ニ之ヲ許可シ
 而シテ其ノ命令ハ次回ノ國會ニ於テ承諾ヲ受クヘキ者トシタ
 リ千八百七
 十八年法

第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

本條豫算議案ヲ以テ衆議院ニ最先ノ特權ヲ付シタリ蓋豫算ヲ議
 スルハ政府ノ財務ト國民ノ生計トヲ對照シ兩々顧應シ豐儉ノ程
 度ヲ得セシムルヲ要ス此レ乃衆民ノ公選ニ依リ成立スル代議士

ノ職任ニ於テ尤緊切ナリトスル所ナリ

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫

ヨリ之ヲ支出シ將來增額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協賛ヲ要セス

第六十四條ニ豫算ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘキコトヲ定メタリ而シテ本條ハ皇室經費ノ爲ニ其ノ例外ヲ示ス者ナリ

恭テ按スルニ皇室經費ハ天皇ノ尊嚴ヲ保ツ爲ニ缺クヘカラサルノ經費ヲ供給スル國庫最先ノ義務タリ其ノ使用ハ一ニ宮廷ノ事ニ係リ議會ノ問フ所ニ非ス從テ議會ノ承諾及検査ヲ要スルコトナカルヘキナリ皇室費額ヲ豫算及決算ニ記載スルハ支出總額ノ成分ヲ示ス者ニ過キスレテ之ヲ議會ノ議ニ付スルノ一款トナスニ非サルナリ而シテ其ノ將來ニ增額ヲ要スルニ當リ仍議會ノ協

賛ヲ要スルハ其ノ臣民ニ負擔セシムルノ租稅ト密切ナル關係ヲ有スルヲ以テ之ヲ衆議ニ詢ハムトスルナリ

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ス

憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歲出トハ第一章ニ掲ケタル天皇ノ大權ニ依レル支出即チ行政各部ノ官制陸海軍ノ編制ニ要スル費用文武官ノ俸給并ニ外國條約ニ依レル費用ニシテ憲法施行ノ前ト施行ノ後トヲ論セス豫算提議ノ前ニ既ニ定マレル經常費額ヲ成ス者ヲ謂フ法律ノ結果ニ由ル歲出トハ議院ノ費用議員ノ歲費手當諸般ノ恩給年金法律ニ依レル官制ノ費用及俸給ノ類ヲ謂

フ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出トハ國債ノ利子及償還會社營業ノ補助又ハ保證政府ノ民法上ノ義務又ハ諸般ノ賠償ノ類ヲ謂フ

蓋憲法ト法律トハ行政及財務ノ上ニ至高ノ標準ヲ示ス者ニシテ國家ハ立國ノ目的ヲ達スル爲ニ憲法ト法律トヲ以テ最高ノ主位ヲ占領セシメ而シテ行政ト財務トヲ以テ此レニ從屬セシメサルヘカラサルナリ故ニ豫算ヲ議スル者ハ憲法ト法律トニ準據シ憲法上及法律上國家ノ制置ニ必要ナル資料ヲ給備スルヲ以テ當然ノ原則トセサルヘカラス其ノ他前定ノ契約及民法上又ハ諸般ノ義務ハ均ク法律上ノ必要ヲ生スル者トス若議會ニシテ豫算ヲ議スルニ當リ憲法上ノ大權ニ準據セル既定ノ額又ハ法律ノ結果ニ由リ及法律上ノ義務ヲ履行スルニ必要ナル歳出ヲ廢除削減スル

コトアラハ此レ即チ國家ノ成立ヲ破壊シ憲法ノ原則ニ背ク者トセサルコトヲ得ス但シ既定ノ歳出ト謂フトキハ其ノ憲法上ノ大權ニ基ツクニ拘ラス新置及増置ノ歳出ハ仍議會ニ於テ論議ノ自由ヲ有スルナリ而シテ政府ノ同意ヲ經ルトキハ憲法上既定歳出及法律ノ結果ニ由リ又ハ義務ノ必要ニ由ル者ト雖法律及時宜ノ許ス限ハ仍省略修正スルコトヲ得ヘキナリ

(附記)「ポーリウ」氏ノ著論ニ據ルニ瑞典ニ於テハ國會ニシテ歳出ヲ削減シ現在建設ノ事業ヲ繼續スルニ足ラサル場合ニ於テハ國王ノ認許ヲ得スシテ之ヲ決議スルコト能ハス瑞典憲法第八十九條其ノ他、獨逸各邦ニ於テ議會ハ憲法上ノ義務又ハ法律及民法上ノ義務ニ生スル必要ナル歳出ヲ拒ムコトヲ得サルノ主義ヲ掲クル者ハ「ブラウン」シユ、ワイヒ「憲法」第百七十三條「オルデンブル

ヒ憲法第百八十七條ハノ一フル憲法第九十一條「サクツン、マイ
ニシテ」憲法第八十一條是ナリ又一タヒ豫算ヲ以テ定メタル
ノ經費ハ其ノ事項及目的ノ消滅セサル間ハ國會ノ承諾ナクシ
テ之ヲ増加スルコトヲ得ス政府ノ承諾ナクシテ之ヲ削減スル
コトヲ得サルコトヲ定ムル者ハ「アルデンブルヒ」憲法第二百三
條是ナリ此レ皆各國ノ舊慣又ハ成文ニ存スル者ニシテ而シテ
近世國家原理ノ發達ト符合スル者ナリ茲ニ附記シテ以テ參考
ニ備フ

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定

メ繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルコトヲ得
歲費ハ毎年ニ議定スルヲ以テ常トス蓋國家ノ務ハ活動變遷シテ
一定ノ繩尺ヲ以テ概律スヘカラス故ニ國家ノ費用ハ亦前年ヲ以

テ後年ニ推行スヘカラス但シ本條特別ノ須要アル場合ニ對シ例
外ヲ設クルハ陸海軍費ノ一部又ハ工事製造ノ類數年ヲ期シ其ノ
成功ヲ見ルヘキ者議會ノ協賛ヲ以テ數年ニ亘ルノ年限ヲ定ムル
コトヲ得ルナリ

第六十九條

避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ
又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ
豫備費ヲ設クヘシ

本條ハ豫備費ノ設ヲ以テ豫算ノ不足及豫算ノ外ノ必要ナル費用
ヲ補給スルコトヲ定ム蓋第六十四條ハ豫算超過及豫算外支出ニ
付議會ノ事後承諾ヲ求ムヘキコトヲ掲ケタリ而シテ其ノ超過及
額外支出ハ何等ノ財源ニ資リテ以テ之ヲ供給スル乎ヲ指示セス
此レ本條ニ豫備費ノ設ヲ定ムルヲ必要トスル所以ナリ

(附記) 各國豫備費ノ設ヲ參考スルニ荷蘭ニ於テハ各省ニ豫備費五万「フロリン」ヲ置キ又政府一般ノ爲ニ五万「フロリン」ヲ置キ以テ議決科目ノ不足ヲ補給スルニ備フ伊國千八百六十九年ノ會計法ハ豫算ノ中ニ豫備費ヲ設クルコトヲ掲ケ豫算定額ノ避クヘカラサル不足ニ應スル爲ニ二項ノ定額ヲ許可ス其ノ一ハ義務ト及命令ニ依リ生スル經費ヲ支辨スヘキ豫備費トシ四百「フラン」其ノ二ハ別ニ一項ヲ爲スヘキ豫知スヘカラサル經費ノ爲四百ノ豫備費トス四百「フラン」其ノ第一豫備ノ使用ハ會計検査院ノ登記ヲ經テ大藏長官之ヲ施行シ第二豫備ノ使用ハ大藏長官ノ發議ニ由リ内閣會議ヲ經テ勅令ヲ以テ之ヲ定ム普國ハ各省ニ豫備費ヲ置キ更ニ大藏省ニ非常豫備費ヲ置ク此レ皆豫算ノ不足ト豫算ノ外ノ必要ヲ補充スル爲ニ豫メ設クル者ナリ瑞典ハ豫

見セサル場合ニ備フル爲ニ國債局ノ收入ヨリ二種ノ豫備金ヲ設ケ其ノ第一種ハ國家ノ防禦又ハ重要緊急ナル事件ニ備ヘ第二種ハ戰時ノ用ニ備フ此レ亦別ニ一法タリ

第七十條 公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

本條ノ解釋ハ既ニ第八條ニ具ハル但シ第八條ト異ナル所ノ者ハ第八條ハ憲法ニ於テ議會開會セサルトキハ臨時會ノ召集ヲ要セス本條ハ議會開會セサルトキハ臨時會ノ召集ヲ要ス而シテ内外

ノ情形ニ由リ議會ヲ召集シ能ハサルトキニ限り始メテ議會ノ叶
同ヲ待タスシテ必要ノ處分ヲ施スコトヲ得蓋本條ハ專ラ財政ニ
關ルヲ以テ更ニ一層ノ慎重ヲ加フルナリ

所謂財政上必要ノ處分トハ立法議會ノ協賛ヲ經ヘキ者ニシテ而
シテ臨時緊急ノ場合ノ爲ニ協賛ヲ經スシテ處分スルヲ謂フ

臨時財政ノ處分ニシテ將來ニ國庫ノ爲ニ義務ヲ生スル者若議會
ノ事後承諾ヲ得サルトキハ何等ノ結果ヲ生スヘキ乎蓋議會ノ承
諾ヲ拒ムハ將來ニ繼行スルノ効力ヲ拒ム者ニシテ其ノ既ニ行ヘ
ル過去ノ處分ヲ追廢スルニ非ス第八條ノ說明既ニ之ヲ詳ニス故ニ勅令ニ依リ
既ニ生シタルノ政府ノ義務ハ議會之ヲ廢スルコト能ハス抑事若
此ニ至ラハ國家不祥ノ結果トシテ視サルコトヲ得ス此レ本條ノ
國家ノ成立ヲ保護スル爲ニ至テ已ムヲ得サルノ處分ヲ認メ又議

會ノ權ヲ存崇シテ尤慎重ノ意ヲ致ス所以ナリ

第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

議會自ラ議定ノ結局ヲ爲サスシテ閉會ニ至ルトキハ之ヲ豫算ヲ議定セストス兩議院ノ一ニ於テ豫算ヲ廢棄シタルトキハ之ヲ豫算成立ニ至ラストス其ノ他議會未タ豫算ヲ議決セスシテ停會又ハ解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ再ヒ開會スルノ日ニ至ルマテ亦豫算成立セサルノ場合トス

議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ其ノ結果ハ大ニシテハ國家ノ存立ヲ廢絶シ小ニシテハ行政ノ機關ヲ麻痺セシムルニ至ル千八百七十七年北米合衆國ニ於テ國會陸軍

ノ豫算ヲ議定スルコトヲ遷延シタルカ爲ニ三月ノ間兵士ノ給養ヲ缺クコトヲ致セリ同年澳斯特刺利ニ於テ「メルボルン」ノ議院ハ豫算ノ全部ヲ廢棄シタリ是レ民主主義ノ上ニ結架セル邦國ノ情態ニシテ我カ國體ノ固ヨリ取ルヘキ所ニ非サルナリ乃或國ニ於テ此ノ場合ヲ以テ一ニ勢力ノ判決スル所ト爲シ議會ニ拘ラスシテ政府ノ專意ニ任シ財務ヲ施行セルカ如キモ(普國千八百六十二年ヨリ六十六年ニ至ル)亦非常ノ變例ニシテ立憲ノ當然ニ非サルナリ我カ憲法ハ國體ニ基ツキ理勢ニ酌ミ此ノ變狀ニ當リ前年ノ豫算ヲ施行スルヲ以テ終局ノ處分トスルコトヲ定メタリ

第七十二條 國家ノ歲出歲入ノ決算ハ會計検査院之ヲ検査確定シ政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

豫算ハ會計ノ初トシ決算ハ會計ノ終トス議會ノ會計ヲ監督スルニ其ノ方法二ツアリ即チ一ハ期前ノ監督ニシテ二ハ期後ノ監督トス期前ノ監督トハ次年度ノ豫算ヲ承諾スルヲ謂ヒ期後ノ監督トハ經過セル年度ノ決算ヲ審査スルヲ謂フ此ノ期後ノ監督ヲ取ル爲ニ政府ハ會計検査院ノ検査ヲ經タル決算ヲ以テ該院ノ報告ヲ併セテ議會ニ提出スルノ義務アリ

検査院ノ職掌ハ一ニ各部ノ出納官ノ證明ヲ検査シ其ノ責任ヲ解除スルニ在リ二ニ支拂命令官ノ處分ヲ監督シテ其ノ豫算超過豫算外ノ支出及豫算又ハ法律勅令ニ違反シタル事件ヲ検査スルニ在リ三ニ國庫ノ總決算及各省決算報告ヲ検査シ各出納官ノ報呈シタル各部會計ノ積數ト對照シ以テ之ヲ確定スルニ在リ

會計検査院ノ行政上ノ検査ハ議會ノ立法上ノ検査ノ爲ニ準備ノ地ヲ爲ス者ナリ故ニ議會ハ検査院ノ報告ト俱ニ政府ノ決算書ヲ受ケテ其ノ正當ナルヲ承諾シ之ヲ決定スヘシ

會計検査院ハ政府ノ會計ヲ監査スル爲ニ獨立ノ資格ヲ有セサルヘカラス故ニ其ノ組織及職權ハ裁判官ト同ク法律ヲ以テ之ヲ定メ行政命令ノ區域ノ外ニ在ル者トス但シ其ノ検査上ノ規程ノ如キハ仍勅令ノ定ムル所タルヘキノミ

第七章 補則

第七十三條 將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ

此ノ場合ニ於テ兩議院ハ各其ノ總員三分ノ二以上出

席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

恭テ按スルニ憲法ハ我カ天皇ノ親ク之ヲ制定シ上祖宗ニ繼キ下後世ニ遺シ全國ノ臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ其ノ條則ニ遵由セシメ以テ不磨ノ大典トナス所ナリ故ニ憲法ハ紛更ヲ容サス但シ法ハ社會ノ必要ニ調熟シテ其ノ効用ヲ爲ス者ナリ故ニ國體ノ大綱ハ萬世ニ亘リ永遠恒久ニシテ移動スヘカラスト雖改制ノ節目ハ世運ト俱ニ事宜ヲ酌量シテ之ヲ變通スルハ亦已ムヘカラスルノ必要タラスムハアラス本條ハ將來ニ向テ此ノ憲法ノ條項ヲ改定スルノ事アルヲ禁セス而シテ憲法ヲ改定スル爲ニ更ニ特別ノ要件ヲ定メタリ

通常ノ法律案ハ政府ヨリ之ヲ議會ニ付シ或ハ議會之ヲ提出ス而シテ憲法改正ノ議案ハ必勅命ヲ以テ之ヲ下付スルハ何ツヤ憲法ハ天皇ノ獨リ親ラ定ムル所タリ故ニ改正ノ權ハ亦天皇ニ屬スヘケレハナリ改正ノ權既ニ天皇ニ屬ス而シテ仍之ヲ議會ニ付スルハ何ツヤ一タヒ定マルノ大典ハ臣民ト俱ニ之ヲ守リ王室ノ專意ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ欲セサルナリ議院ニ於テ之ヲ議決スルニ通常過半數ノ議事法ニ依ラシメスシテ必三分二ノ出席ト及多數ヲ望ムハ何ツヤ將來ニ向テ憲法ニ對スル慎守ノ方嚮ヲ扶持スルナリ

本條ノ明文ニ據ルニ憲法ノ改正條項ヲ議會ノ議ニ付セラル、ニ當リ議會ハ議案ノ外ノ條項ニ連及シテ議決スルコトヲ得サルヘキナリ又議會ハ直接又ハ間接ニ憲法ノ主義ヲ變更スルノ法律ヲ

議決シテ以テ本條ノ制限ヲ逃ル、コトヲ得サルヘキナリ

第七十四條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ル

ヲ要セス

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ憲法ノ改正ハ既ニ議會ノ議ヲ經ルヲ要ス而シテ皇室典範ハ獨其ノ議ヲ經ルヲ要セサルハ何ツヤ蓋皇室典範ハ皇室自ラ皇室ノ事ヲ制定ス而シテ君民相關カルノ權義ニ涉ル者ニ非サレハナリ若夫改正ノ必要アルニ當テ之ヲ皇族會議及樞密顧問ニ付スルノ條則ノ如キハ亦典範ニ於テ之ヲ制定スヘキ者ニシテ而シテ憲法ニ之ヲ示明スルノ要用ナシ故ニ此ノ條ニ之ヲ併セ掲ケサルナリ

但シ皇室典範ノ改正ニ由リ直接又ハ間接ニ此ノ憲法ヲ變更スルノ事アラシメハ憲法ノ基址ハ容易ニ移動スルノ不幸ナキコトヲ保タサラムトス故ニ本條特ニ憲法ノ爲ニ保障ヲ存スルノ至意ヲ示シタリ

第七十五條 憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變更スルコトヲ得ス

恭テ按スルニ攝政ヲ置クハ國ノ變局ニシテ其ノ常ニ非サルナリ故ニ攝政ハ統治權ヲ行フコト天皇ニ異ナラスト雖憲法及皇室典範ノ何等ノ變更モ之ヲ攝政ノ斷定ニ任セサルハ國家及皇室ニ於ケル根本條則ノ至重ナルコト固ヨリ假攝ノ位置ノ上ニ在リ而シテ天皇ノ外何人モ改正ノ大事ヲ行フコト能ハサルナリ

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用非タ

ルニ拘ラス此ノ憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總テ
 遵由ノ効力ヲ有ス

歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總
 テ第六十七條ノ例ニ依ル

維新ノ後法令ノ頒布ハ御沙汰書又ハ布告及布達ト稱フ明治元年

八月十三日法令頒布ノ書式ヲ定メ以後被仰出御沙汰等ノ文字ヲ

用井ルハ行政官ニ限り其ノ他ノ五官神祇官會計官軍務官及府縣ハ

申達ノ字ヲ以テス五官府縣ニ於テ重立タル布告ハ行政官ニ差出

シ議政官決議ノ上行政官ヨリ達セシム五年正月八日達ニ自今布

告ニ番號ヲ附シ各省ノ布達亦同様タラシム此レヨリ始メテ布告

布達ノ名稱ニ區別ヲナシタリ六年七月十八日達ニ布令中揭示ス

ヘキ者ト然ラサル者トヲ區別シ布令書ノ結文ノ例ヲ定メ各廳及

官員ニ達スルハ此旨相達又ハ此旨可相心得トシ全國一般ニ布告スルハ此旨布告トシ華族或ハ社寺ニ達スルハ此旨華士族へ布告又ハ此旨社寺へ布告トス其ノ各廳及官員ニ達スル者ハ揭示ヲ要セス此レ人民ニ對スル布告ト官廳訓令トヲ區別シタルノ始ナリ十四年十二月布告布達式ヲ定メ布告ハ太政大臣奉勅旨布告トシ布達ハ太政大臣ヨリ布達シ並ニ主任ノ卿之ニ連署ス同月三日布告ニ法律規則ハ布告ヲ以テ發行ス從前諸省限布達セル條規ノ類ハ自今總テ太政官ヨリ布達ス此レ諸省布達ノ制ヲ廢シ及始メテ諸省卿ノ連署ノ制ヲ定メタルナリ十九年二月二十六日ノ勅令ニ法律勅令ハ上諭ヲ以テ公布シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣及主任ノ大臣之ニ副署ス閣令ハ內閣總理大臣之ヲ發シ省令ハ各省大臣之ヲ發ス以上之ヲ總フルニ維新以來ノ官令ニ御沙汰書ト

曰ヒ布告ト曰ヒ布達ト曰ヘルハ其ノ文式ニ依テ稱呼シタルナリ
 其ノ法ト曰ヒ戸籍法律ト曰ヒ新律綱令ト曰ヒ徵兵令戒類條例ト曰
 ヒ新聞條律例ト曰ヒ改定律規則ト曰フ府縣會規類ハ總テ皆人民ニ
 公布シ遵由ノ効力ヲ有セシムルノ條則ヲ謂フノ義ニシテ其ノ間
 ニ輕重スル所アルニ非サルナリ而シテ十九年二月二十六日ノ勅
 令ニ至テ始メテ法律勅令ノ名稱ヲ正シタリシモ何ヲカ法律トシ
 何ヲカ勅令トスルニ至テハ亦未タ一定ノ限界アルニ非サルナリ
 八年ノ元老院ノ章程ニ元老院ハ新法ノ設立舊法ノ改定ヲ議定ス
 ト謂ヒ十九年二月二十六日ノ勅令ニ法律ノ元老院ノ議ヲ經ルヲ
 要スル者ハ舊ニ依ルト謂フ然ルニ八年以後布告ノ中何ヲカ指シ
 テ法律トスヘキヤ未タ明白ナラス從テ元老院立法ノ權限亦明劃
 ナラス十一年二月二十二日十九年以後勅令ニシテ院議ニ付スル

者亦少シトセス要スルニ憲法發布ノ前ニ當テハ法律ト勅令トハ其ノ名稱ヲ殊ニシテ其ノ事實ヲ同クスル者タルニ過キス而シテ其ノ名稱ニ依テ以テ効力ノ輕重ヲ區別スヘカラサルハ十九年以前布告ト布達ト時アリテ區別アリ時アリテ區別ナキニ異ナルコトナキナリ

故ニ憲法ノ指定スル所ニ從ヒ法律ト命令トノ區別ヲ明ニセムトスルハ必立法議會開設ノ時期ニ於テ其ノ始ヲ履ムコトヲ得ヘク而シテ立法議會開設ノ前ニ當テハ法律規則命令其ノ他何等ノ名稱ヲ用非何等ノ文式ヲ用非タルモ此ヲ以テ其ノ効力ノ輕重ヲ判斷スルノ繩尺トスルコトヲ得ス

前日ノ公令ハ何等ノ名稱ヲ用非タルモ總テ遵由ノ効力アリトス但シ此ノ憲法ニ矛盾スル者ハ憲法ノ施行ノ日ヨリ其ノ法令ノ全

文或ハ或ル條章ニ限り効力ヲ失フヘキナリ

前日ノ公令今日ニ現行シテ將來ニ遵由ノカアル者ノ中ニ就テ更ニ憲法ノ定ムル所ニ依ルトキハ必其ノ法律タルコトヲ望ム者アリ第二十條兵役類第十一條租稅ノ類今過去ニ汙リテ一々之ニ法律ノ公式ヲ予ヘ以テ憲法ノ文義ニ副ハシメムトスルハ形式ニ拘リ徒ニ多事ヲ爲スニ過キス故ニ本條ハ現行ノ法令條規ヲシテ總テ皆遵由ノカアラシムルノミナラス其ノ中憲法ニ於テ法律ヲ以テ之ヲ望ム者ハ即チ法律トシテ遵由ノカアラシムルコトヲ示ス者ナリ而シテ法律トシテ遵由ノカアラシムル者ニシテ若將來ニ於テ改正ヲ要スルトキハ其ノ前日ニ勅令布達ヲ以テ公布シタルニ拘ラス總テ皆法律ヲ以テ舉行スルヲ要スルコト知ルヘキナリ